令和４年度　千葉市・大学等共同研究事業報告書

千葉都心の道路空間における歩行者中心の場づくりに関する研究

令和５年２月

千葉大学 工学研究院建築学コース 安森亮雄研究室
千葉市 都市局都市部 都心整備課

目次

要約 …… 4
共同研究者一覧 …… 4

本文 …… 5
1 章　序 …… 5
1-1. 研究の目的と課題
1-1-1. 研究の目的
1-1-2. 研究にかかる行政課題
1-1-3. 研究の効果
1-2. 既往研究
1-3.「千葉公園通りホコ天」の概要
1-4. 研究の概要

2 章　千葉市中心市街地の街路特性 …… 11
2-1. 本章の背景と目的
2-2. 研究及び中心市街地の概要
2-3. 市街地及び街路の変遷
2-4. 街路の空間構成
2-5. 街路のまちづくり活動
2-6. 千葉市中心市街地の街路特性
2-7. 千葉公園通りの特徴と位置付け
2-8. 小括

3 章　プラットフォーム構築 …… 21
3-1. 実行委員会の設立
3-2. 公民学連携によるプラットフォーム構築

4 章　ワークショップの経緯と内容 …… 25
4-1. 従来の取組みからの学び WS
4-2. まち歩き WS
4-3. 将来像イメージ WS
4-4. 通りに座ってみよう WS
4-5. 小括

5 章　設いのデザイン提案 …… 37
5-1. 家具のコンセプトとデザイン
5-2. ロゴのコンセプトとデザイン
5-3. 幕の設置

6 章　アクティビティ調査による効果検証 …… 45
6-1. 背景と目的
6-2. 分析方法
6-3. 沿道建物の間口の構成
6-4. 道路空間の設い
6-5. 道路空間の活動
6-6. 間口・設い・活動からみた道路の浸透性
6-7. 間口・設い・活動の配列からみた道路の連続性
6-8. 小括

7 章　結 …… 71

共同研究者一覧

■千葉大学

全体統括：安森亮雄（大学院工学研究院建築学コース教授）

＜研究協力＞

調査・分析　：星野結妙（大学院融合理工学府建築学コース修士 2 年）
　　大森真彩（総合工学科建築学コース 4 年）

家具デザイン：篭太一（大学院融合理工学府建築学コース修士 1 年）
　　大川奈津美（大学院融合理工学府建築学コース修士 1 年）

　家具制作　：安森研究室学生 12 名

ロゴデザイン：張益準（大学院工学研究院デザインコース准教授）
　　改田涼　（大学院融合理工学府デザインコース修士 1 年）
　　高橋康幸　（総合工学科デザインコース 4 年）

■千葉市

　丸山 尚正（都市局都市部都心整備課課長）
　勝地 康裕（都市局都市部都心整備課主査）
　松崎 秀也（都市局都市部都心整備課主任技師）

要約

本研究の目的は、「千葉都心の道路空間における歩行者中心の場づくり」について、「千葉都心ウォーカブル推進社会実験」の対象地域のひとつである千葉公園通りを対象に、社会実験とその後の展開の期間において、道路空間に設いのデザインを提案し、その効果をアクティビティ調査により検証し、歩行者中心の場づくりのエリアマネジメントに向けた知見を得ることである。

調査研究の方法は、まず、研究の概要と課題を整理し（１章）、次に、中心市街地全体の街路特性を、街路の変遷・空間構成・まちづくり活動から把握した（２章）。また、千葉公園通りにおける歩行者中心の場づくりのプラットフォームについて、社会実験中とその後の展開を、大学研究室と学生の参画により追跡した（３章）。これらの位置付けをふまえて、現地等で段階的なワークショップを実施した（４章）。その成果をもとに、道路空間の新たな設いのデザイン提案とDIYによるストリートファニチャーの製作、およびロゴとカラーの提案を大学研究室と学生の参画により行った（５章）。最後に、新たな設いの実施前後における人々の活動の変化を、アクティビティ調査により比較検証した（６章）。

その結果、中心市街地の街路特性は、明治期に成立し歩行者優先の空間を持つ房総往還と千葉街道、旧千葉駅から県庁に伸びるまちづくり活動の軸、および、明治期に発展した旧中心エリアと、昭和戦後に成立した千葉駅中心エリアの「3 軸・２エリア」で把握できること（２章）、場づくりのプラットフォームは、社会実験中の千葉市役所を主体に沿道店舗が参加する体制から、社会実験の終了に伴い、民間主体・地域主体の体制へ段階的に以降しつつあること（３章）を把握した。また、段階的なワークショップを実施し、まち歩きによる課題の把握、将来イメージの構想、滞在可能な場所の抽出を行った。さらに、その成果をもとに、道路空間の設いのデザインを提案し、道路の水平面と傾斜面の２通りに置くことができるスツール、２～３人用のベンチ、カウンター状のテーブルからなる３種類の木製ストリートファニチャーを考案し、DIYにより製作した。さらに、千葉公園のハスの花（ピンク）、ハスの葉（グリーン）、池の水面（ブルー）にから成るシンボルロゴとテーマカラーを提案した（５章）。最後に、アクティビティ調査の結果から、新たな設いの実施により、道路空間における断面方向の浸透性が促進され、また、延長方向の連続性がＪＲ千葉駅側・中央部・千葉公園側の３エリアの特性に応じて形成されたことが明らかとなった（６章）。

以上をふまえた考察および政策提案として、第一に、中心市街地の街路特性の観点から、千葉公園通りと他の街路を含めた特徴を明確化し、昭和戦後に成立した街路が多いＪＲ千葉駅周辺のエリアにおいてネットワークによる回遊性を形成すること、第二に、プラットフォームの体制について、公民学連携の取り組みを深化させ、通りの両端の千葉公園やＪＲ千葉駅西口の取り組みと連携していくこと、第三に、道路空間の設いのデザインについて、比較的狭い幅員に対応し、千葉公園通りならではの景観形成に寄与する今回の方向性を継承するとともに、継続利用できる耐久性を確保し、保管と運用の仕組みを確立すること、第四にアクティビティ調査で検証された、道路と民地を含めた浸透性と、千葉駅側・中央部・千葉公園側のエリアの特性に応じた、道路空間の連続性の双方を促進すること、これらの四点を重ねながら、今後の歩行者中心の場づくりを推進することが望まれる。

1章　序

1-1.　研究の目的と課題
　1-1-1.　研究の目的
　1-1-2.　研究にかかる行政課題
　1-1-3.　研究の効果
1-2.　既往研究
1-3.「千葉公園通りホコ天」の概要
1-4.　研究の概要

1-1.　研究の目的と課題

1-1-1.　研究の目標

千葉都心は戦災復興により整備され、現在インフラや建築物の更新の時期が到来しており、まちづくりの転換期を迎えている。従来自動車中心の空間づくりが進められて来たが、公共交通の利用促進、コロナ禍におけるオープンスペースの価値見直しなど、市街地を取り巻く社会情勢が大きく変化している。このまちづくりの転換期に、人口減少社会における「エリア価値向上」を目指して、千葉都心で取り組まれている「リノベーションまちづくり」「ウォーカブル推進」をふまえ、公民学の連携による「歩行者中心の場づくり」（プレイスメイキング）について共同研究を実施した。具体的には、令和４年８月まで実施した「千葉都心ウォーカブル推進社会実験」の実施エリアである千葉公園通りを主な対象として、道路空間の新たな設いのデザインの提案と、その効果検証としてアクティビティ調査を行い、さらに、エリアマネジメントに向けたプラットフォームの構築に向けた知見を得ることを目的とする。

1-1-2.　研究にかかる行政課題

歩きやすい・歩行者に優しいまちに向けて、全国的に「ウォーカブル」なまちづくりが推進され、国においても、コロナ禍における「道路占用許可の特例」や「歩行者利便増進道路」（ほこみち）などの施策が始まっている。そうした中で、千葉市においては下記の行政課題が存在する。

①縮退時代におけるまちづくりとして、地域の遊休資源を活用し、民間の稼ぐ力を活かした「**千葉駅周辺エリア価値の向上**」

②千葉駅周辺における「**歩行者中心の空間づくり**」の実践の積み重ねを通じた「**将来ビジョンの明確化とその共有**」

③千葉駅周辺における歩行者中心の空間づくりに向けた「**戦略的なまちづくりの推進**」が必要

1-1-3.　研究の効果

（１）独創性・先駆性

公民学連携による千葉駅周辺の戦略的なまちづくりの推進体制の構築を見据えた共同研究である。研究代表者は、千葉大学に赴任前に、地方都市市街地におけるオープンカフェ[注1)]や川床[注2)]の実施に携わり、デザイン（実践）とリサーチ（調査）を相互にフィードバックした取り組みを行なってきた（グッドデザイン賞等受賞）。都心整備課と大学が連携した共同研究は、千葉都心における新たな居場所と風景を産み出し、独創的かつ先駆的な事例になる。

（2）実現可能性

令和２年度から実施している千葉都心ウォーカブル推進社会実験では、千葉大学等と千葉市が連携し取り組んでいる。研究代表者は、令和２年度から千葉駅西口のアクティビティ調査[注3)]、令和３年度から千葉公園通りの社会実験のサポートをしてきた。これらの経験から市と大学の連携体制がすでにあり、引き続き連携した共同研究に円滑に移行する。

（3）社会的貢献度

千葉市においては、他都市にみられるアーバンデザインセンターやまちづくり会社のような明確なまちづくり組織が存在しておらず、持続的なまちづくりのために、地域の住民や学生がまちの当事者として関われる仕組みをつくる必要性がある。地域住民、企業、大学を含めたプラットフォームの形成を目指し、将来的なまちを担うプレイヤー育成に寄与する。

（4）データの活用

得られたアクティビティ調査の定性的なデータをもとに、居場所や風景の連続性の構築を目指す。また、ウォーカブル社会実験の効果検証において実施している人流データ等の定量的データや、アンケート調査と比較することとで、傾向把握などを併せて把握する。

1-2.　既往研究

千葉都心における道路活用に関する研究には、千葉駅前大通りで開催された「パラソルギャラリー」の実施に至るプロセスを追った研究がある[注4)]。他の都市を対象としたものに、宇都宮市オリオン通りにおけるオープンカフェの実践を通して、人々の利用による活動と、家具等の設えによる空間の双方から、道路空間における滞在の特徴を検討した研究がある[注5)]。本研究は、こうした活動と空間の両側面をもとに、さらにプロジェクトの実施前後での効果検証も行う。

参考文献

注１）道路空間における滞在のための設えと活動 宇都宮市オリオン通りオープンカフェの実践を通して：安森亮雄，渡邉翼，泉山塁威，日本建築学会技術報告集，第 25 巻，第 59 号，pp.337-342，2019.2

注２）かまがわ川床桜まつり：宇都宮大学安森亮雄研究室，宇都宮まちづくり推進機構，日本デザイン振興会 2015 年度グッドデザイン賞，日本建築士会連合会まちづくり賞奨励賞 https://www.g-mark.org/award/describe/43250

注３）駅前空間の利活用におけるアクティビティに関する研究 - 千葉都心ウォーカブル推進社会実験を事例として -：和田なつき（指導教員 安森亮雄），千葉大学工学部総合工学科建築学コース 2020 年度卒業論文

注 4）渡辺 直 , 加藤浩司 , 宮脇 勝 , 北原理雄 : 中心市街地の賑わい創出を目的とした公共空間利用実験 - 千葉市「都市景観市民フォーラム」を事例に - , 2001 年度第 36 回日本都市計画学会学術研究論文集 , pp.793-798

注 5）安森亮雄 ， 渡邉翼 ， 泉山塁威：道路空間における滞在のための設えと活動 - 宇都宮市オリオン通りオープンカフェの実践を通して - , 日本建築学会技術報告集 第 25 巻 第 59 号 , pp.337-342 , 2019.2

1-3. 「千葉公園通りホコ天」の概要

千葉公園通り（**図 1.1**）は JR 千葉駅から千葉公園へのアプローチとなっている。「千葉都心ウォーカブル推進社会実験」の一貫として実施された千葉公園通りホコ天は、令和 2 年に開始され、令和 4 年 8 月に実験期間が終了した後、将来的な道路改修を見据え、同年 9 月から運営体制を民間主体・市共催に移行し継続されている（**表 1.1**）。開催は、千葉公園のイベントに連動し月に一度程、車両の通行抑制をかけた上で行っており、道路専用許可、道路使用許可により一時的に店頭販売や路上パフォーマンス、家具の設置が可能である。筆者らは、通りを休憩や憩いなどで滞在する空間にすることを目的に、テーブル、ベンチ、スツールを新規に制作し設置した。また、ホコ天の運営主体（ちこほこ実行委員会）に沿道事業者や地域住民とともに属しており、月 1 回行われる企画ミーティングにも参加している。

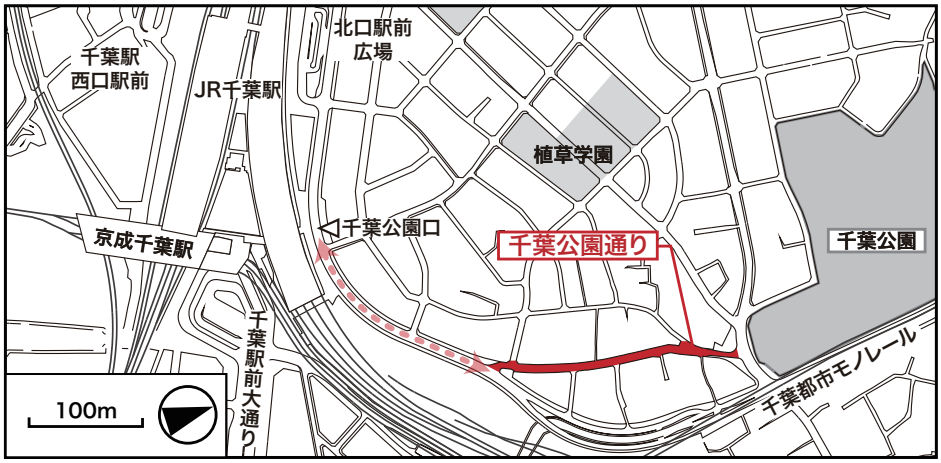


図 1.1　千葉市街地と千葉公園通り

表 1.1　千葉公園通りホコ天の概要及び共同研究の位置付け

	2020年9月～2022年8月	2022年9月~11月(以降継続)
名称	千葉都心ウォーカブル推進社会実験	ちこほこ（千葉公園通りホコ天）
主催	千葉市都市局都心整備課	ちこほこ実行委員会 （千葉公園通りホコ天を通じてひと中心のまちづくりを推進する実行委員会）
関連法規	道路占用許可、道路使用許可	
実施内容	・路上パフォーマンス、店頭販売　など ・千葉公園で開催されるイベントやマルシェ等と連携	
共同研究	テーマ：千葉都心の道路空間における歩行者中心の場づくりに関する研究 実施　：家具の設計提案・制作、アクティビティ調査による効果検証 主体　：千葉大学安森亮雄研究室、千葉市都市局都心整備課 協力　：千葉公園通り周辺店舗・住民、千葉大学張益準研究室	

1-4.　研究の概要

「千葉公園通り」を中心に、アクティビティ調査、設いのデザイン提案、プラットフォーム構築の３点と、考察として他エリアとの比較検証を実施する。

①アクティビティ調査（6 章）

本研究では、交通量等の定量的調査に留まらず、人々の活動等の定性的調査を重視し、社会実験中におけるアクティビティを調査する。道路空間における人々の活動として、個人／集団、性別、年齢層などの属性、立つ／座る／歩くなどの姿勢、飲食／会話／ながら活動などの行為をもとに、社会実験で実施した設いとの関係を検証し、歩行者中心の居場所としての特徴を把握する。

②設いのデザイン提案（4 章）（5 章）

本研究では、学生参加・市民参加により、ファニチャー等の新たな設いのデザインを提案する。道路空間を歩行者の居場所にするために、持ち運びや、落ち着き、軒先と道路との関係、フレキシブルな可変性などを考慮して、スツール、カウンター等をデザインする。千葉公園ならではの風景を形成する素材や形態も検討する。ワークショップ等を通して、デザインや実際の制作を行い、場所への愛着や参加者の関係性をあわせて醸成する。

③プラットフォーム構築（3 章）

本研究では、社会実験を一過性のものにしないために、地域住民・企業・大学等によるプラットフォームの構築を目指す。これには中長期の関係性の醸成が必要であるが、実施年度ではそのきっかけや母体組織の形成を目指し、社会実験後のエリアマネジメントへとつなげる。

④他エリアとの比較検証（2 章）

本研究では、千葉駅東側から伸びる広幅員の「中央公園プロムナード」、隣接する西千葉駅で住宅地や大学が立地する「学園通り」を含めた広域な歩行者のエリアを想定し、それらと比較検証しながら、千葉駅北側の「千葉公園通り」を考察する。

これらを通して、道路空間、周辺住宅地、大学キャンパス、公園等のネットワークによる、千葉都心エリアにおける歩行者中心の空間づくりに向けた知見を得る。

図 1.2　取組みのスケジュール

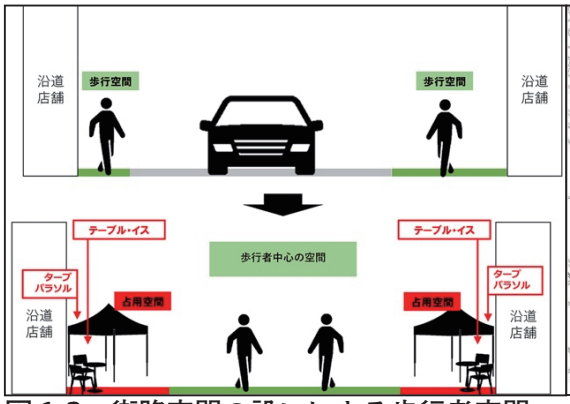


図 1.3　街路空間の設いによる歩行者空間

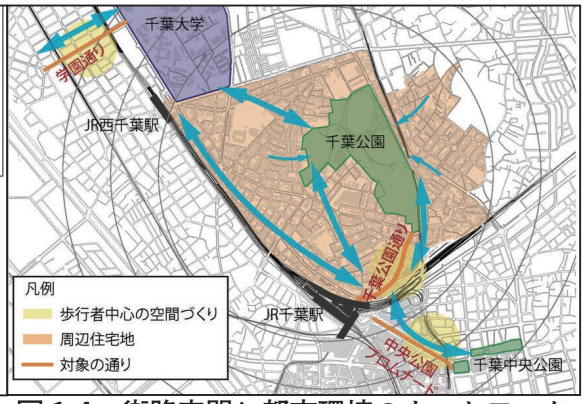


図 1.4　街路空間と都市環境のネットワークによるウォーカブルシティの形成

2章　千葉市中心市街地の街路特性

2-1.　本章の背景と目的
2-2.　研究及び中心市街地の概要
2-3.　市街地及び街路の変遷
2-4.　街路の空間構成
2-5.　街路のまちづくり活動
2-6.　千葉市中心市街地の街路特性
2-7.　千葉公園通りの特徴と位置付け
2-8.　小括

千葉公園通りの特徴と位置付けについて、他エリアとの比較を交えながら、街路の変遷・空間構成・まちづくり活動から分析し明らかにした。

2-1.　本章の目的と背景

千葉市中心市街地は、街路の幅員や電柱地中化、歩道の整備等に差があることや、明治期までの旧街道の成り立ちや、近代化以降の駅の移転後の市街地の変遷の中で、都市構造に軸性がなく、回遊性が低いことが問題となっている。そこで、本節では街路の変遷と空間構成、まちづくり活動を把握することにより、千葉市中心市街地の街路特性を明らかにし、今後の整備や取組みに向けた基礎的な知見を得ることを目的とする。

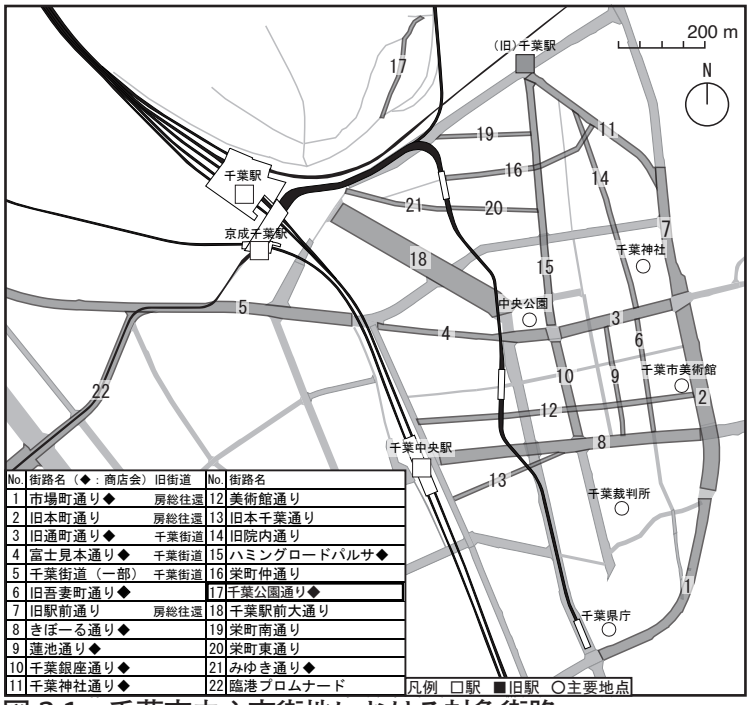
2-2.　研究及び中心市街地の概要

2-2-1.　研究対象及び研究手法

本節では、千葉市中心市街地の中から、千葉公園通りを含む現在及び過去に名前のある通りと商店街のある通り[文1~4]の 22 街路を対象とした（**図 2.1**）。まず、市街地及び街路の変遷を把握する（**図 2.2**）。次に街路の空間構成を検討し、街路に属する商店会・現在までの取組みにより街路でのまちづくり活動について把握する。それらをもとに千葉市中心市街地の街路特性を明らかにする。

2-2-2.　中心市街地の概要

千葉市中心市街地は、県庁を始めとした公的施設が集まっており、千葉駅を中心として商業施設が広がるなど、多くの都市機能が集積している。戦前と戦後で駅の場所が大きく移動し、時代によって都市の構造が変化したことが特徴的である。



No.	街路名（◆：商店会）	旧街道	No.	街路名
1	市場町通り◆	房総往還	12	美術館通り
2	旧本町通り	房総往還	13	旧本千葉通り
3	旧通町通り◆	千葉街道	14	旧院内通り
4	富士見本通り◆	千葉街道	15	ハミングロードパルサ◆
5	千葉街道（一部）	千葉街道	16	栄町仲通り
6	旧吾妻町通り◆		17	千葉公園通り◆
7	旧駅前通り	房総往還	18	千葉駅前大通り
8	きぼーる通り◆		19	栄町南通り
9	蓮池通り◆		20	栄町東通り
10	千葉銀座通り◆		21	みゆき通り◆
11	千葉神社通り◆		22	臨港プロムナード

図 2.1　千葉市中心市街地における対象街路

参考文献

1）株式会社ゼンリン：ゼンリン住宅地図千葉県 千葉市中央区 ,2020 年 2 月
2）千葉市ホームページより：2022 年 9 月 2 日
3）日本都市協会：昭和 31 年度
4）千葉市：平成 17 年 3 月

2-3.　市街地及び街路の変遷

2-3-1.　市街地の変遷

千葉市中心市街地（**図 2.1**）の変遷を把握するために地図を収集し、9 つの地図が入手できた（**表 2.1**、**図 2.3**）。入手できた最も古い地図は 1882 年のもので、そこまでの年代を明治前期（-1882 年）とする。次に古い地図までの年代を明治後期（1882-1903 年）とし、終戦前最後の地図までの年代を大正～昭和戦前期 (1903-1930 年)、戦後の成長期を昭和戦後期 (1930-1978 年）とした。それぞれから最も変化の多かった年の地図を、現代（2015 年）までを検討した。

表 2.1　地図リスト

1882年	千葉町の市街地図 1)
1903年	今昔マップon the web 2)
1921年	今昔マップon the web
1930年	今昔マップon the web
1952年	今昔マップon the web
1967年	今昔マップon the web
1978年	今昔マップon the web
1987年	今昔マップon the web
2015年	地理院タイル 3)

図 2.2　分析モデル

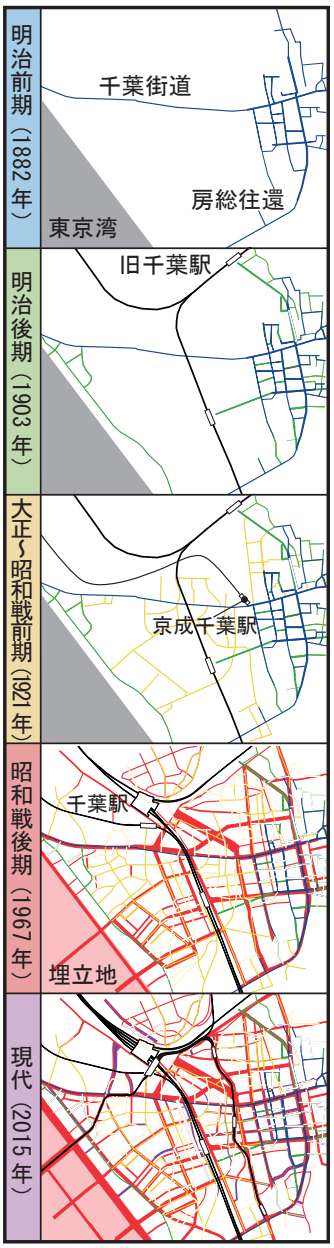


図 2.3　街路の拡大変遷図

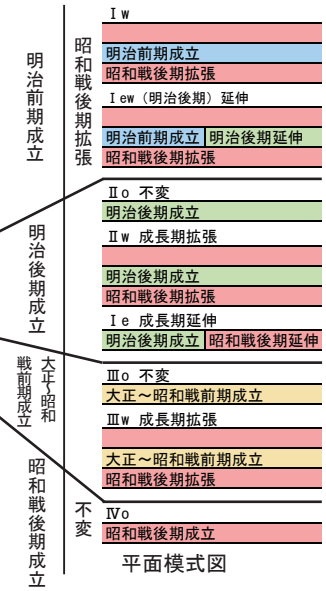
2-3-2.　街路の変遷

本節では、街路の成り立ちに着目し、地図を比較した時の街路の変化を分析した。街路に変化が見られた年から、大きく 4 つの変遷パタンに分類できた（**表 2.2**）。地図で道が確認出来た年を出現とし、沿道に建物群が確認出来た年を成立とし、成立時期に着目して分析する。図は、街路を平面的にみた時の模式図である。

最も古い、明治前期までに成立した街路（Ⅰ）が約 3 割であった。これらは全て成長期に街路幅員が拡張されるもの (Ⅰ w) であった。次に、明治後期に沿道に建物群が成立した街路（Ⅱ）は、成立後不変なもの (Ⅱ o) や成長期に拡張したもの (Ⅱ w)、延伸したもの (Ⅱ e) と多様な変遷が見られた。大正～昭和戦前期に成立した街路 (Ⅲ) は、最も少数であった。昭和戦後期に成立した街路（Ⅳ）は、約 3 割を占めている。全体として、成長期に拡張した街路や成立した街路が多いことがわかる。

表 2.2　街路の変遷パタン

		明治前期	明治後期	大正～昭和戦前期		昭和戦後期			変遷パタン
No.	道路名	1882	1903	1921	1930	1952	1967	1978	22街路
1	市場町通り	出現・成立					拡張		Ⅰw (6)
2	旧本町通り	出現・成立					拡張		
3	旧通町通り	出現・成立					拡張		
4	富士見本通り	出現・成立					拡張		
5	千葉街道(一部)	出現・成立					拡張		
6	旧吾妻町通り	出現・成立					拡張		
7	旧駅前通り	出現・成立	延伸				拡張		Ⅰew (2)
8	きぼーる通り	出現・成立				延伸	拡張		
9	蓮池通り	出現	成立						Ⅱo (1)
10	千葉銀座通り	出現	成立				拡張		Ⅱw (2)
11	千葉神社通り		出現・成立				拡張		
12	美術館通り		出現・成立			延伸			Ⅱe (1)
13	旧本千葉通り			成立					Ⅲo (2)
14	旧院内通り			出現・成立					
15	ハミングロードパルサ			出現・成立			拡張		Ⅲw (1)
16	栄町仲通り				出現	成立			Ⅳo (7)
17	千葉公園通り					出現・成立			
18	千葉駅前大通り					出現	成立		
19	栄町南通り						出現・成立		
20	栄町東通り						出現・成立		
21	みゆき通り						出現	成立	
22	臨港プロムナード							出現・成立	



2-4.　街路の空間構成

本節では、街路の空間構成について、電柱地中化や歩道の整備、また街路の断面的な特徴や駅や公共施設などの街路の終点の要素（**表 2.3**）、花壇などの道路の付属物（**表 2.4**）から検討し、幅員も含めて 4 つの空間パタンに分類できた（**表 2.5**）。

まず、電柱地中化がされておらず、歩道と車道が分節されていない低整備パタン (A) が約 3 割あり､幅員が小さく狭隘な街路といえる。千葉公園通りはここに該当する。次に、電柱が地中化され、歩道が整備された歩行者優先パタン (B) には、全てに植栽があり、半数に道路上庇があった。さらに終点に駅又は公共施設がある歩行者優先 / 終点施設パタン (C) は約 3 割を占める。それに加えて、街路に花壇が整備されている高整備パタン (D) は、幅員が大きく、駐輪場が設置されていることから、最も整備された街路といえる。

表 2.3　街路の終点要素

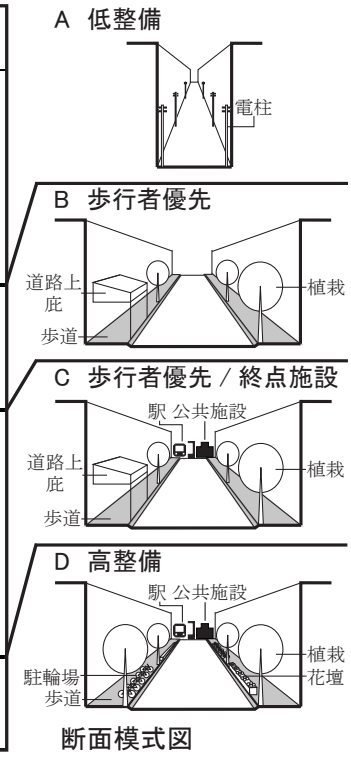
駅 (S)	旧駅 (S’)	公共施設 (Pu)
6	7	9
寺社 (T)	旧寺社 (T’)	公園 (Pu)
1	2	8

表 2.4　街路の付属物

花壇 (f)	植栽 (t)	道路上庇 (e)
3	13	6
駐輪場 (p)	サイン (s)	ボラード (b)
5	5	1

表 2.5　空間パタン

No.	最大幅員[m]	最小幅員[m]	車線数	電柱地中化	歩道	終点要素	道路付属物	街路構成パタン
17	8.2	7.6	1			Pa,T		A (7)
14	7.3	7.0	2			Pa		
19	11.1	10.8	2					
20	8.2	8.0	2					
9	5.7	4.0	1				s	
13	8.1	6.0	2			S’,Pu		
16	8.1	7.8	2			S		
2	36.3	35.6	5	済	有	T’	t	B (4)
5	28.1	19.9	4	済	有		t,p	
6	16.2	15.8	2	済	有		t,e	
7	36.3	22.0	5	済	有		t,e	
3	26.0	24.9	5	済	有	S’,Pu,Pa	t,e	C (8)
4	23.3	11.7	2	済	有	S’,Pu,Pa	b	
10	20.4	19.8	2	済	有	S’,Pu,Pa	t,p	
15	16.0	15.9	2	済	有	S’,Pu,Pa	t,s	
11	16.1	15.6	2	済	有	S’,Pu	t,e,s	
21	8.0	7.8	2	済	有	S	s	
1	27.9	20.9	4	済	有	S,Pu,R	t,e	
12	20.6	15.0	2	済	有	S,Pu	t,e	
22	52.3	19.0	5	済	有	Pu,Pa	f,t,p	D (3)
18	58.6	22.7	5	済	有	S,S’,Pa	f,t,p	
8	33.3	26.0	5	済	有	S,T’	f,t,p,s	



断面模式図

2-5.　街路のまちづくり活動

本節では、街路のまちづくり活動に着目し、街路に属する商店会（2-5-1）と現在までの取組み（2-5-2）について検討した。

2-5-1.　街路に属する商店会

22 街路のうち、半数の街路に商店会が存在する（**表 2.6**）。設立が最も早いのが千葉中央一番街商店会 (No.2)、遅いのがみゆき通り商栄会 (No.21) であり、千葉公園通りでも商店会が組織されている。全体として資料番号が若く、街路の成立時期が早いほど商店会の設立時期も早い傾向がある。

2-5-2.　現在までの取組み

現在まで行われてきた取組みを、祭り・出店・社会実験から検討した（**表 2.7**）。まず、祭りでは、「親子三代夏祭り」（No.3,10,15）が、1974 年の千葉開府 850 年を記念して始まり、毎年 8 月に千葉市を美しくする会が主催し、パレードなど多彩な催し物が実施されている。「富士見ストリートフェス」（No.4）は 1995 年から開始された千葉市の道路占用許可の特例制度活用事例である。次に、出店では、1994 年から毎月開催されている「いい街ちばフリーマーケット」（No.10) があり、歩行者天国で毎回 100 以上の店が並び、パフォーマンスも披露されている。社会実験は 1999 年に国土交通省により制度化され、その翌年に全国に先駆けて「パラソルギャラリー」（No.18) が開始され、50 本のパラソルが並べられ、市民によるアート作品やハンドメイド品を展示している。また、千葉公園通り (No.17) では、千葉市と千葉大学との共同研究として、「千葉都心ウォーカブル推進社会実験」が行われた。

2-5-3.　商店会と取組みの関連

商店会と取組みの両側面の関連をまちづくりパタンとして整理した（**表 2.8**）。商店会がある街路のうち、取組みが見られる街路（ア）と取組みのない街路（イ）が約半数ずつみられた。商店会がなく取組みが行われている街路（ウ）は、千葉駅前大通り (No.18) のみであった。

表 2.6　街路に属する商店会

No.	商店会	設立
2	千葉中央一番街商店会	1953
6	あずま通り親和会	1953
1	市場町商栄会	1955
3	富士見商店街協同組合	1961
10	千葉銀座商店街振興組合	1963
15	栄町通り商店街振興組合	1965
11	千葉神社通り商栄会	1971
8	中央銀座商店会振興組合	1977
21	みゆき通り商栄会	1986
9	蓮池倶楽部商店街	
17	千葉公園通り商店会	

表 2.8　まちづくりパタン

	商店会あり	商店会なし
取組みあり	3　4　10 15　17 ア　商店会・取組み	18 ウ　取組み
取組みなし	1　6　8 9　11　21 イ　商店会	2　5　7 12　13　14 16　19　20 22

表 2.7　街路における取組みの様子

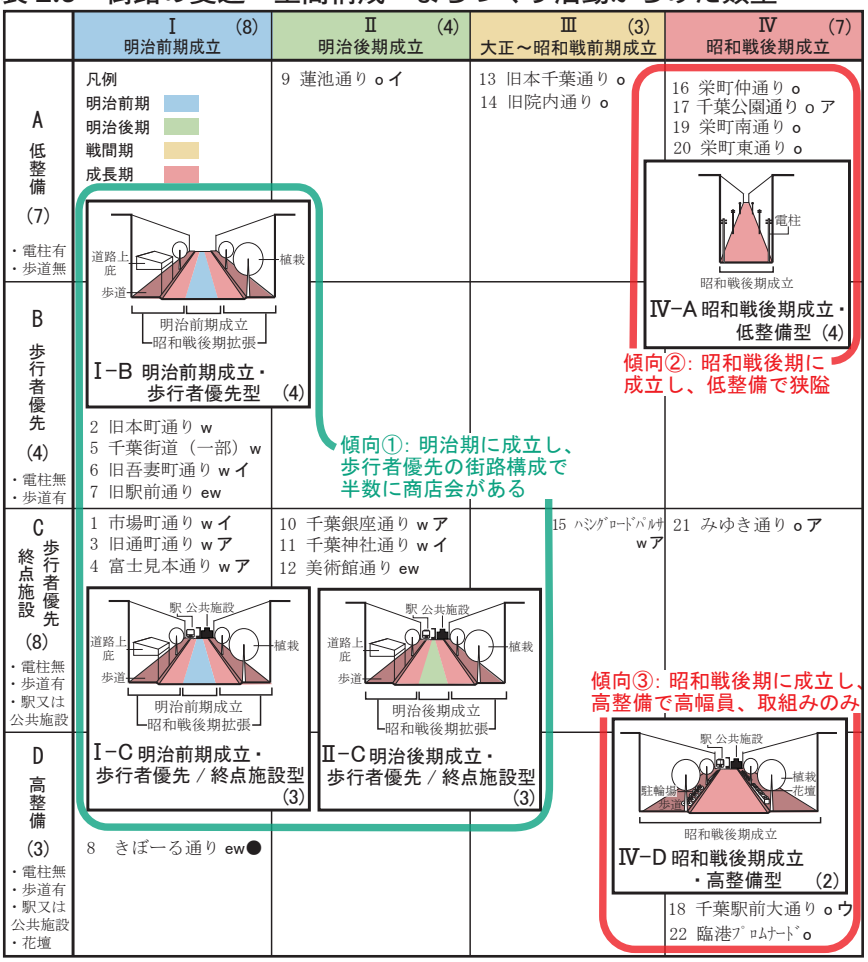
2-6.　千葉市中心市街地の街路特性

2-6-1.　変遷・空間・まちづくりからみた街路の類型

本節では、3 節で導いた街路の変遷パタン（横軸）と、4 節で導いた空間パタン（縦軸）でマトリクスを作成し、5 節で導いたまちづくりパタンを併せて検討し、類型を導いた (**表 2.9**)。まず、明治前期に成立した街路は、歩行者優先の空間構成であるもの（Ⅰ -B）とさらに終点に施設のあるもの（Ⅰ -C）に分かれる。明治後期に成立したものは、歩行者優先 / 終点施設の空間構成に集中した（Ⅱ -C)。昭和戦後期に成立したものは、最も整備が進んでいない街路構成と（Ⅳ -A)、最も整備された空間構成（Ⅳ -D）の両極に該当した。

以上の類型を比較し、類型間の傾向を導き出した。まず、明治期（Ⅰ , Ⅱ）に成立したものは、歩行者優先の空間構成（B,C）に集中しており、ここでは空間的に整備やまちづくり活動がされやすい（傾向①)。また、昭和戦後期（Ⅳ）に成立した低整備（A）なものは同年代の中では比較的成立年代が早く、終戦直後の混乱に伴う狭隘な街路が残存している（傾向②)。千葉公園通りはここに該当する。同じく昭和戦後期に成立し、高整備（B）なものは同じ空間パタンの中でも特に高幅員で、商店会がないものの、社会実験などの取組みがある千葉駅前大通り（No.18）が含まれている（傾向③)。

表 2.9　街路の変遷・空間構成・まちづくり活動からみた類型



2-6-2.　類型の分布による千葉市中心市街地の街路特性

本節では千葉市中心市街地の都市構造について把握するために、前節までで導いた街路の類型とパタンを地図上に配置し（**図 2.4**）、近い特性を持つ街路の連続や地区を抽出した。

明治期に成立し、歩行者優先の特性を持つ街路が連なるのが、旧街道の房総往還 (No.1,2,7・Ⅰ w-B,C) である。旧駅前通り (No.7) の街路は明治前期まで千葉神社の手前でクランクしており、明治後期に旧千葉駅が開通したことに伴い千葉銀座通り (No.11) の街路が開通した際に直線に整備されたとみられる。

同じく旧街道であり、近い特性を持つ街路が連なるのが、千葉街道（No.3,4,5・Ⅰ w, Ⅰ ew-B,C) である。千葉街道は、房総往還との交点が終点となっているため、より新しい街路であると考えられる。旧通町通り (No.3) 富士見本通り (No.4) はいずれも商店会及び取組み事例があり、まちづくり活動が盛んである。房総往還と千葉街道に属する全ての街路が明治期に成立し、歩行者優先の空間構成を持つ傾向①に属している。

旧千葉駅と千葉県庁を結ぶように商店会及び取組みのある街路が連なる、千葉銀座通り (No.10) とハミングロードパルサ (No.15) は、いずれも商店会及び取組み事例のある街路であり、まちづくり活動軸であった。

房総往還と千葉街道の交点から南西に商店会を持つ街路が広がるのが旧中心エリア (No.6,9,10) である。吾妻町通り (No.6) が明治前期に成立していたのに対し蓮池通り (No.9) と千葉銀座通り (No.10) が明治後期に成立していることから、市街地が千葉市美術館（旧川崎銀行）等のある房総往還付近の東から西に向かって広がっていったことがわかる。

千葉駅を起点として放射状に昭和戦後期に成立した街路が伸びているのが、千葉駅中心エリア (No.16 ～ 21）である。戦後の駅移転に伴い、新しく市街地が整備されたことがわかる。昭和戦後期に成立し、低整備である傾向②の街路は全てこのエリアに属している。千葉公園通りはこのエリアに該当する。また、昭和戦後期に成立し、高整備である傾向③の千葉駅前大通り (No.18) は、このエリアと旧中心エリアを繋ぐように伸びている。以上のように、千葉市中心市街地の都市構造は、3 軸と 2 エリアで把握することができる。

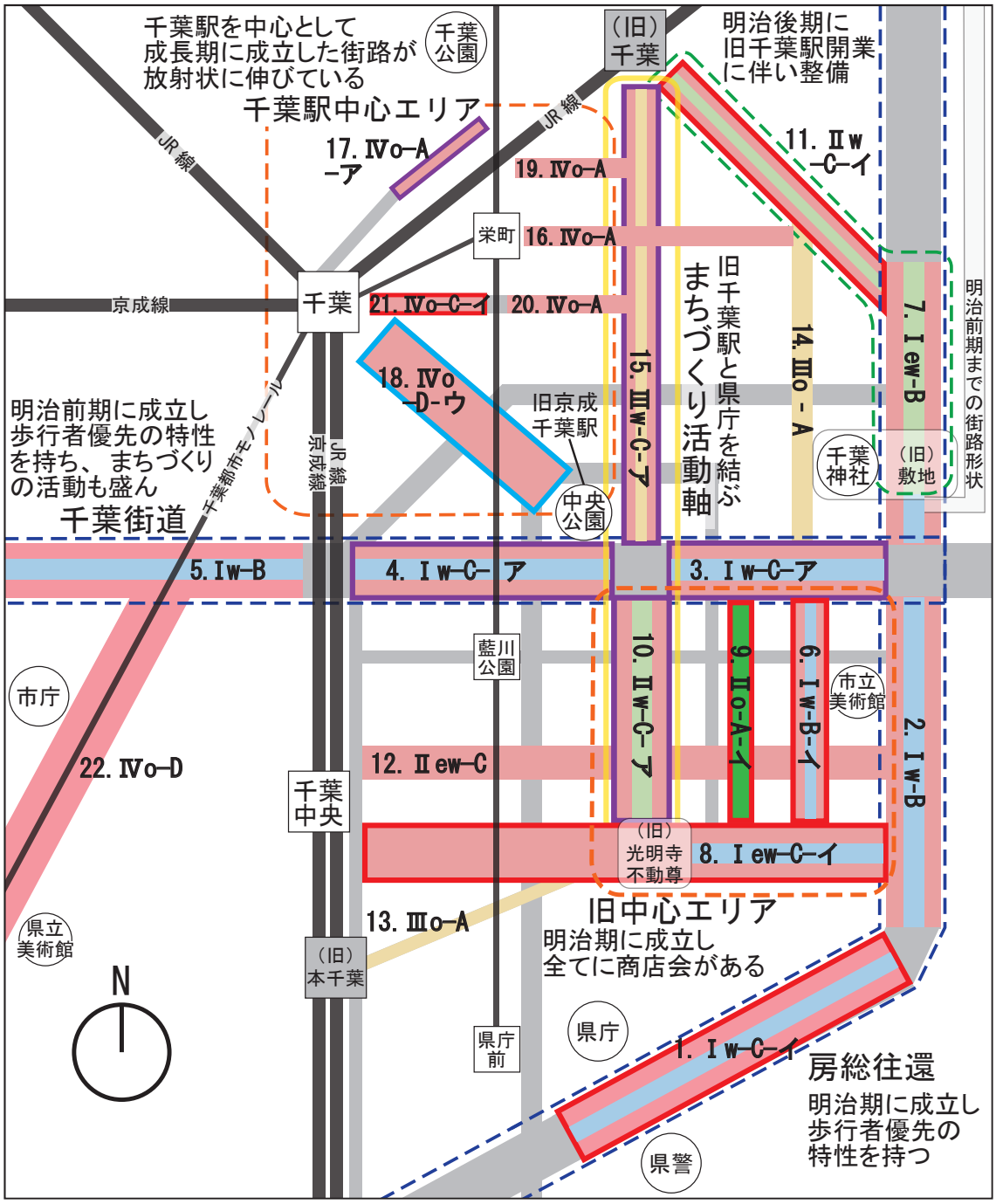


図 2.4　類型の分布による千葉中心市街地の街路特性

2-7.　千葉公園通りの特徴と位置付け

千葉公園通りは４つの年代の中で一番新しく、昭和戦後期に成立した街路である。街路の空間構成は、電柱地中化がされておらず、歩道と車道が分節されていない、最も低整備なものである。終点に千葉公園と厳島神社があり、過去には厳島神社の参道としての役割も果たしていたが、現在では神社と通りは直接には接続されていない。また、従来は沿道に個店が立ち並び、住民と商店主が一体となっていたが、近年は千葉公園通り商店会が組織されているものの、住民との乖離やコロナ禍の影響により、まちづくり活動が低調となっている。

類型は昭和戦後期に成立し低整備な型（IV-A）であり、昭和戦後期に成立した街路の中では比較的成立が早く、戦後の混乱に伴い残された狭隘な街路である傾向がある。また、千葉駅を中心に放射状に昭和戦後期の街路が広がる、千葉駅中心エリアに属している。

2-8.　小括

千葉市中心市街地の街路を対象として、街路の変遷・空間構成・まちづくり活動による街路の特性を調査分析した。その結果、街路の類型の傾向として、明治期に成立し、歩行者優先の街路構成を持つものはまちづくり活動が盛んである傾向、成長期に成立し、低整備なものは同年代のものの中では比較的古い傾向、同じく成長期に成立し、高整備なものは特に高幅員である傾向という３つの傾向を明らかにした。更に、これらの街路の分布により、千葉市の街路特性は、明治期に成立し歩行者優先の空間を持つ房総往還と千葉街道、および旧千葉駅から県庁に伸びるまちづくり活動の軸という３軸と、明治期に千葉神社付近から西部へ発展した旧中心エリア、昭和戦後に成立した街路が放射状に伸び社会実験等の取組みが行われる千葉駅中心エリアという２エリアで表すことができることを明らかにした。このことにより、複雑に捉えられていた千葉市中心市街地の都市構造を街路の特性から捉え直すことができ、今後の整備やまちづくりにおいて新たな視点となると考えられる。

3章　プラットフォーム構築

3-1.　実行委員会の設立
3-2.　公民学連携によるプラットフォーム構築

本研究において社会実験を一過性のものにしないために、地域住民・企業・大学等によるプラットフォームの構築を行った。

3-1.　実行委員会の設立

千葉公園通りでは、令和２年９月から令和４年８月までの約２年間にわたり、千葉市が主体となって「千葉都心ウォーカブル推進社会実験／ CHIBA NOKI-NYOKI Project（以下、ウォーカブル社会実験）」を実施した。

このウォーカブル社会実験では、実施主体である千葉市が道路占用許可、都市公園占用許可、道路使用許可を取得し、社会実験参加者である沿道の店舗などが申込手続きを行うことで、道路や公園などの空間の使用が可能となるという仕組みだった。

ウォーカブル社会実験の終了に伴い、民間主体・地域主体での運営への段階的な移行を目指し、「千葉公園通りホコ天を通じてひと中心のまちづくりを推進する実行委員会（通称：ちこほこ実行委員会）」を組織し、ちこほこ実行委員会が主体となって必要な許可手続きを実施する。

実行委員会の組織は段階的に構築中であるものの、主に沿道店舗のほか、近隣企業、地域住民や千葉大学学生が中心となって運営をしている。

3-2.　公民学連携によるプラットフォーム構築

千葉公園通りでは、千葉市主体のウォーカブル社会実験をきっかけに、千葉大学との共同研究、民間主体のマネジメント体制への段階的な移行により、公民学連携によるプラットフォーム構築が進んでいる（**図 3.1**）。

またこのような動きと同時並行で、千葉市が主体となって「千葉公園通りワークショップ」を運営しており、千葉公園通りと呼ばれる市道弁天 31 号線やその周辺の将来像を、住民、店舗や企業など地域の関係者とともに検討するための議論の場づくりに取り組んでいる。

現時点では、「ちこほこ（千葉公園通りホコ天）」という非日常のイベントの運営を基本とした公民学連携ではあるが、今後ワークショップの進展とともに、日常の道路空間のマネジメントに対しても、それぞれの強みを活かした役割分担のもと、公民学連携を図ることが想定される。

さらには、千葉公園通り周辺だけに限らず、千葉公園再整備とも連動し、千葉駅北エリア全体や千葉駅周辺エリア全体のマネジメントに関しても公民学連携によるプラットフォームが活かせることが理想である。

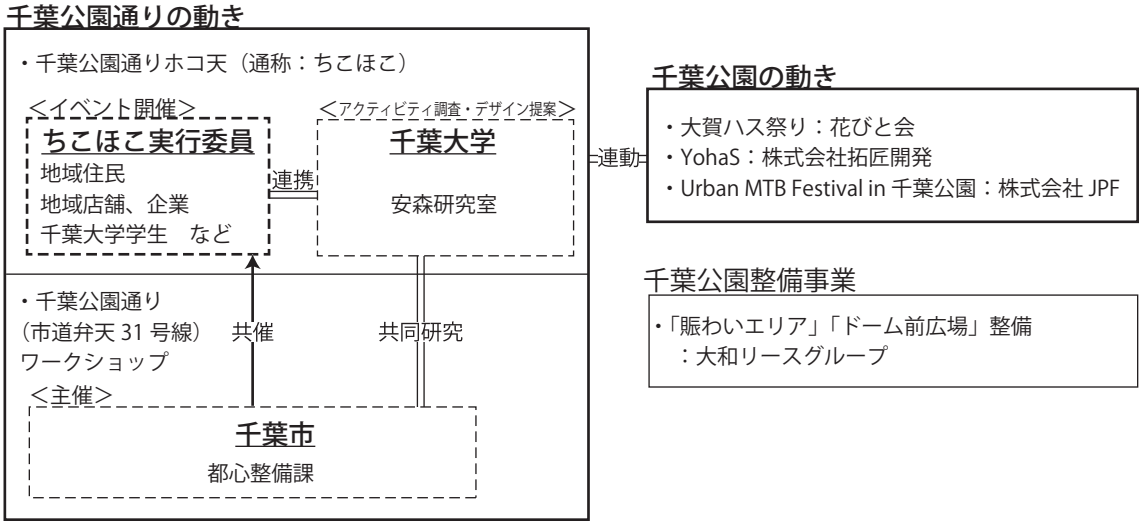


図 3.1　公民学連携の模式図

4章　ワークショップの経緯と内容

4-1.　従来の取り組みからの学び WS
4-2.　まち歩き WS
4-3.　将来像イメージ WS
4-4.　通りに座ってみよう WS
4-5.　小括

計 4 回のワークショップを通じ、「滞在場所」としての千葉公園通りを思索した。

4-1.　従来の取組みからの学び WS

千葉都心における道路活用の先行事例である、パラソルギャラリー（＋栄町再生）に携わってきた千葉大学都市環境システムコースの郭東潤先生にレクチャーを依頼し、従来の取組みからの学び WS を実施した（**表 4.1, 図 4.1**）。

綺麗に整備された歩きやすい、移動のためだけの空間をウォーカブルとして捉えず、パラソルギャラリーを実施する中で行われた、組織づくりやデザインコード作成などを例に上げながら、「ウォーカブルなまち」を作るために重要な多様性と空間性の２つの観点からの話しがあった。

また、10 月 1 日に、コロナ禍を経て開催された 20 年目の「パラソルギャラリー」（駅前大通り）を視察した（**図 4.2**）。現地にて、この取り組みを主導してきた北原理雄 千葉大学名誉教授、郭助教らと意見交換した。北原氏は、プレイスメイキングの潮流を作ったヤン・ゲールの著書（**図 4.3**）の翻訳者でもある。

現地では、従来よりパラソルの間隔を広くし、数を減らしているものの、賑わいの形成を確認することができた。当初から販売を目的としたフリーマーケットではなく、市民のものづくりのギャラリーであることも、各地の取り組みと一線を画する先駆的かつ継続的な取り組みである。

表 4.1　ワークショップの概要

名称	従来の取り組みからの学びWS
目的	千葉市における道路活用について系譜的に捉え直す。
日程	2022年6月20日 10:00-12:00
場所	千葉大学西千葉キャンパス 自然科学棟2 5Fゼミ室
実施内容	郭東潤先生による「パラソルギャラリー」に関するレクチャー
参加者	千葉大学：安森、星野、附田、村山、相澤、大川、篭、小松、杉浦、竹村、永井、宇田川、大森、菊池(悠)、菊池(竜)、山下、渡邊 千葉市　：勝地、松崎、後藤　計18名

図 4.1　ワークショップの様子

図 4.2　パラソルギャラリーの様子

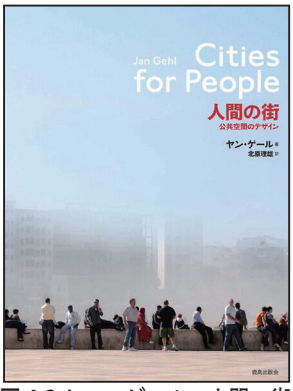


図 4.3 ヤン・ゲール：人間の街

4-2.　まち歩き WS

千葉公園通りにおける課題とポテンシャルの抽出、自由にアイディアを出し合うことを目的に、千葉大学安森研究室 17 名と千葉市職員 3 名、地元の方 1 名が参加し、まち歩きワークショップを実施した（**表 4.2**）。

ワークショップの流れは、まず、14 時半に千葉公園通り駅側の入り口付近に集合し、まち歩きを開始した。約 30 分間、千葉公園通りを中心に、途中ある路地を含め各々自由に散策した。次に、千葉公園側にあるビルの車庫に再度集合し、当日のような平日の通常時と千葉公園通りホコ天を行うイベント時とを重ねて意見交換を行った。通りを 1/200 の縮尺で A1 用紙 2 枚分に印刷した地図を用意し、そこにポストイットを貼っていく形で進めた（**図 4.4**）。最後に、意見のグルーピングを行いまとめた。

結果として（**表 4.3**）、千葉公園通り両端部の入り口部としてのアイストップや、千葉公園通り全体の連続性が課題に上がった。また、千葉公園通り中央部から伸びる路地が魅力的であること、駐車場や建物のセットバック部分が滞在場所として活用し易いであろうことから、通りと民地の浸透性が重要視された。

表 4.2　ワークショップの概要

名称	まち歩きWS
目的	千葉公園通りにおける課題とポテンシャルの抽出、ブレインストーミング
日程	2022年5月23日 14:30-16:00
場所	千葉公園通り（集合：焼鳥まるしん前、意見交換：江澤ビル1F車庫）
実施内容	・千葉公園通りにおけるまち歩き ・事前に行ったアクティビティ調査の結果を共有 ・地図とポストイットを用いて、感想や意見出し ・意見のグルーピングとまとめ
参加者	千葉大学　：安森、星野、附田、村山、相澤、大川、篭、小松、杉浦、竹村、永井、宇田川、大森、菊池(悠)、菊池(竜)、山下、渡邊 千葉市　　：勝地、松崎、後藤 地域従業者：須藤さん(Sudo-bags)　計21名

ワークショップの様子

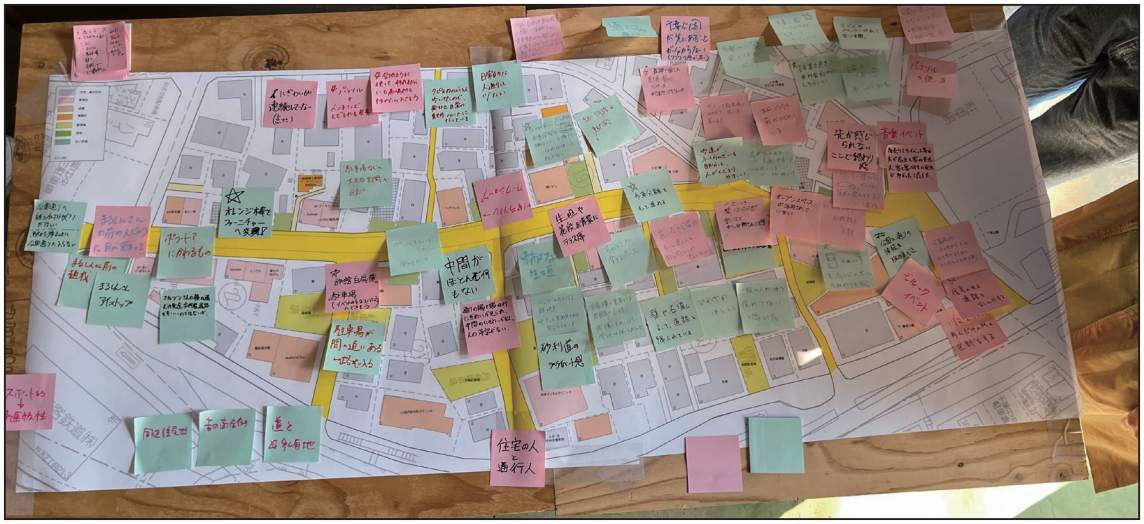
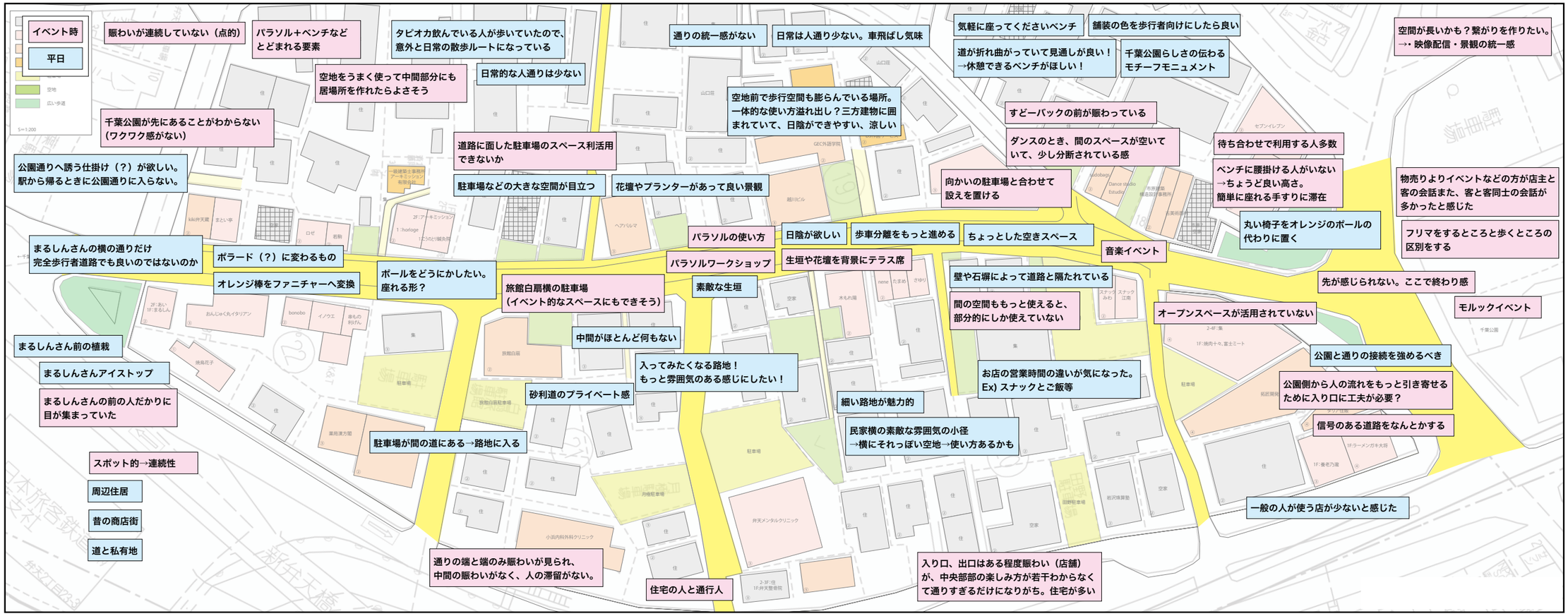


図 4.4　ポストイット

表 4.3　まち歩きワークショップにおいて上がった意見

グループ	状況	枠組み	内容
周辺環境	平日	現状	・周辺に住宅が多く、通り中央部には店舗など住民以外の人が利用できる空間がない ・日常的な人通りは少なく、通行車両は飛ばし気味である ・タピオカ飲んでいる人が歩いていたため、意外と日常の散歩ルートになっているのではないか ・昔の商店街の名残がある
		アイディア	・日陰が欲しい
	イベント時	現状	・住民と通行人が共存している
連続性	平日	現状	・通りの統一感がない
	イベント時	現状	・賑わいが数箇所に集中している一方で、通り中央部には人の滞留がなく、通り全体の連続性が無い
		アイディア	・通り中央部の空間をもっと使っていきたい ・景観に統一感を持たせる工夫があると良い ・映像配信
空地や路地	平日	現状	・細い路地が魅力的 ・通りから少し入ったところに空地や駐車場などの大きな空きスペースが有る ・市有地のちょっとした空きスペースが有る
		アイディア	・砂利が引かれた入ってみたくなる路地をもっと雰囲気のある空間にしたい ・民家横の小径と空地、セットで使い道があるかも ・空地と歩行空間を一体的に使えないか。三方向建物に囲まれており日陰ができやすく涼しい
	イベント時	現状	・まだまだ活用されていないオープンスペースがたくさんある
		アイディア	・道路に面した駐車場のスペース利活用できないか（旅館白扇横の駐車場等） ・通り中央部の空間をもっと使っていきたい
入り口	平日	現状	・公園と通りの接続を強めたい、駅へ帰るときに千葉公園通りに入らない ・まるしんさんが通りのアイストップになる
		アイディア	・千葉公園通りへ誘う仕掛けが欲しい ・まるしんさんの横の通りだけ完全歩行者道路でも良いのではないのか
	イベント時	現状	・まるしんさん前の人だかりに目が集まっていた ・千葉公園が先にあることがわからない、ここで終わり感 ・公園側から人の流れをもっと引き寄せるために入り口に工夫が必要
		アイディア	・ワクワク感を促すような演出や工夫が必要
緑地	平日	現状	・花壇やプランター、素敵な石垣があって良い景観 ・壁や石塀によって道路との隔たりがある
	イベント時	アイディア	・生垣や花壇を背景にテラス席
ボラード	平日	アイディア	・ボラードに代わるものを考えられないか ・座れる形などファニチャーへ変換できないか ・コンビニ近くの丸い椅子を代わりにできないか
設い	平日	アイディア	・気軽に吸われて休憩できるベンチが欲しい
	イベント時	現状	・コンビニ前のベンチは待ち合わせに利用する人が多数で、簡単に座れる高めの腰掛けがよく利用されていた ・利用されていない、置いてあるだけのパラソルがあった
		アイディア	・パラソルにとどまれる要素があると良い
ハード	平日	アイディア	・舗装の色を歩行者向けにしたら良い ・歩車分離をもっと進める ・千葉公園らしさの伝わるモチーフモニュメント
イベント	イベント時	現状	・物売りよりイベントなどの方が店主と客の会話また、客と客同士の会話が多かったと感じた ・音楽イベントが行われていた、sudo-bagsの前が賑わっていた ・ダンスのとき、間のスペースが空いていて、少し分断されている感
		アイディア	・フリマをするところと歩くところの区別 ・パラソルを使うためのワークショップ
時間	平日	現状	・お店の営業時間の違いが気になった。Ex)スナックとご飯等



ポストイットで貼られた意見（2022.5.23 まち歩きワークショップ）

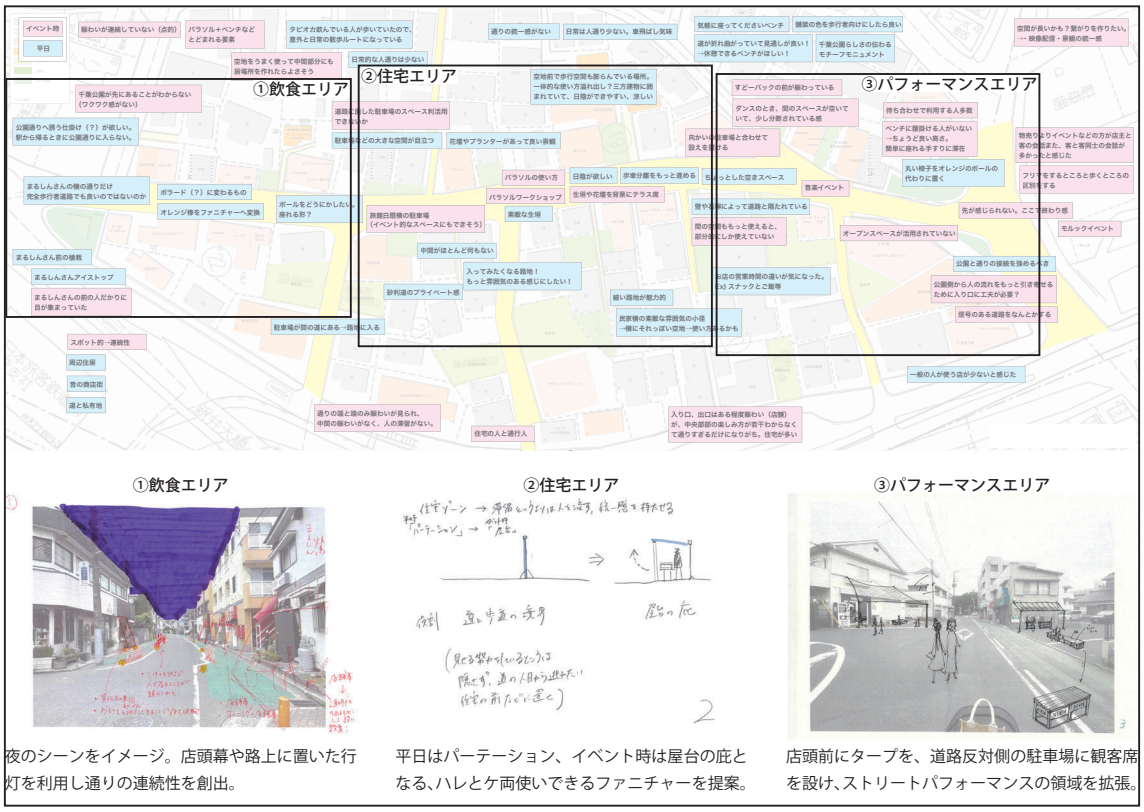
4-3.　将来像イメージ WS

まち歩き WS（4 章 2 節）を踏まえ、千葉公園通りの将来像として具体的なシーンを描いていくことを目的に、将来像イメージワークショップを実施した（**表 4.4**）。千葉公園通りの両端部と中央部を、飲食エリア、住宅エリア、パフォーマンスエリアの 3 つのエリアとして分け、千葉大学安森研究室の学生 17 名が、3 つのグループで内で、それぞれ意見交換を行いながら、写真の上からスケッチしていく形で進めた（**図 4.5**）。

結果として、庇のデザイン、家具（椅子・テーブル等）のデザイン、家具（照明・緑等）のデザイン、路地のデザインの大きく 4 つのきっかけを掴んだ（**表 4.5**）。

表 4.4　ワークショップの概要

名称	将来像イメージWS
目的	千葉公園通りの将来像として具体的なシーンを描く
日程	2022年7月5日 11:30-13:00
場所	千葉大学墨田キャンパス
実施内容	・千葉公園通りを3エリアに分け、各グループで意見交換 ・用意した千葉公園通りの写真の上から、スケッチを行う
参加者	千葉大学　：安森、星野、附田、村山、相澤、大川、篭、小松、杉浦、竹村、永井、宇田川、大森、菊池(悠)、菊池(竜)、山下、渡邊　計17名



夜のシーンをイメージ。店頭幕や路上に置いた行灯を利用し通りの連続性を創出。

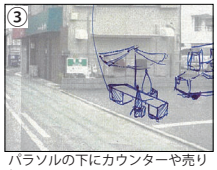
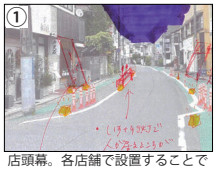
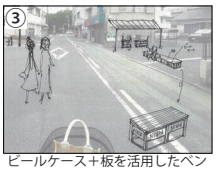
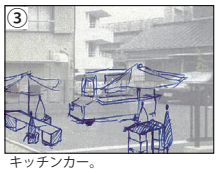
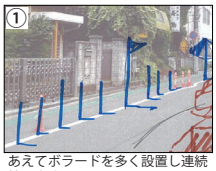
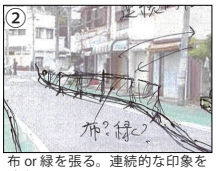
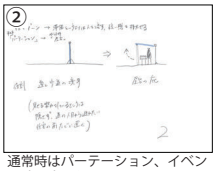
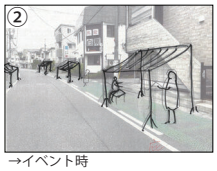
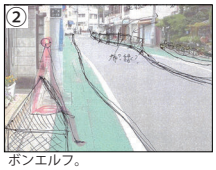
平日はパーテーション、イベント時は屋台の庇となる、ハレとケ両使いできるファニチャーを提案。

店頭前にタープを、道路反対側の駐車場に観客席を設け、ストリートパフォーマンスの領域を拡張。

図 4.5　3 つのエリア分けと学生によるスケッチ

表 4.5　将来像イメージスケッチ

大きく４つのきっかけを掴んだ。
庇（日陰）のデザイン　、家具（椅子・テーブル等）のデザイン　家具（照明・緑等）のデザイン　、路面のデザイン

用途	要素	デザインアイディア
庇	・オーニング ・タープ ・パラソル ・店頭幕	 オーニング＋店頭幕で日陰のある場所を創出。 オーニングにより駐車場も活用。 既存を活かして延長する。 2 階から大きなタープ。  パラソルの下にカウンターや売り場を設置。  店頭幕。各店舗で設置することで宣伝効果と連続性を出す。
家具（椅子・机）	・ベンチ ・机	  ビールケース＋板を活用したベンチ。
家具（光・緑）	・植木 ・行灯 ・キッチンカー	 植木をタープの支えとして利用。 夜に地面に置いた行灯が点灯。店頭幕の重りやボラード代わりに。  キッチンカー。
路面	・車止め ・ボラード ・パーテーション ・緑化ネット ・ボンエルフ ・旗	 あえてボラードを多く設置し連続性を出す。  布 or 緑を張る。連続的な印象を演出。  通常時はパーテーション、イベント時は庇となる。 →通常時  →イベント時 民地を隠すような境界。植木、ベンチ、掲示板が一体となっており、通りに居場所を形成。  ボンエルフ。 植栽ネット。

4-4.　通りに座ってみよう WS

将来像イメージワークショップ（4 章 3 節）で上がった 4 つのきっかけから、本研究の制作物として家具（椅子・テーブル等）を取り上げ、具体的な設置場所やデザインを考えていく上での足がかりとして、千葉公園ホコ天（なつちこほこ）の際に簡易な椅子を貸出し、アンケート調査を行う、通りに座ってみようワークショップを実施した（**表 4.6**）。

千葉公園通りの両端部にそれぞれ拠点を設け、椅子の貸出場所兼アンケートの回収場所とした。アンケートには、千葉公園通りの地図を載せ、椅子を置いた場所をプロットしてもらう他、場所の選択理由や座って行った行為を訪ねる内容とし、来場者や出店者、学生など 18 名に回答を依頼した（**表 4.7**）。

結果として、椅子が置かれた場所は通り全体に満遍なく分布し（**図 4.6**）、「日陰があるから」という理由が最も多かった（**表 4.8**）。通り両端部では、「演奏があるから」という理由で置く人もみられたが、中央部でも「寄りかかれたから」や「緑があったから」という理由で選ぶ人もみられ、事前に行ったアクティビティ調査で活動がみられなかった中央部においても椅子を設置することで滞在性を見出すことができると考えられる。

表 4.6　ワークショップの概要

名称	通りに座ってみようWS
目的	制作する家具の、具体的な設置場所やデザインを考えていく上での足がかりとする。
日程	2022年7月23日 14:00-16:00（晴れ 32℃）
場所	千葉公園通り
実施内容	・折りたたみ可能な簡易な椅子を貸出す。 ・設置場所や場所の選択理由などについてアンケート調査を行う。
参加者	千葉大学　：安森、星野、附田、村山、小松、菊池(悠)、菊池(竜)、渡邊 千葉公園通りホコ天出店者、来場者　計18名

ワークショップの様子

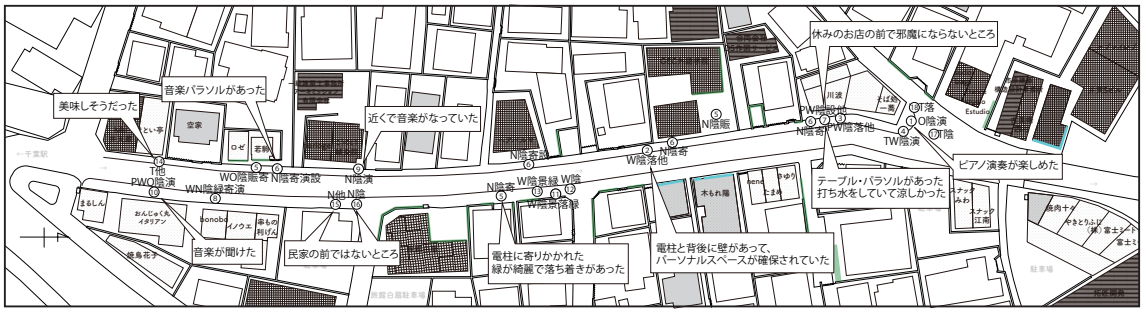


図 4.6　椅子が置かれた場所のプロット

表 4.7　回答者

計18名

10-20歳	1
20-30歳	8
30-40歳	1
40-50歳	4
50-60歳	2
60歳-	2

表 4.8　場所の選択理由

（人）

(陰)日陰があったから	15
(景)景色が良かったから	2
(落)落ち着きがあったから	4
(賑)賑わっていたから	1
(緑)緑があったから	3
(寄)寄りかかれたから	3
(演)演奏があったから	6
(設)設いがあったから	4
(他)その他	5

表 4.9　座って行った行為

（人）

(T)会話	4
(P)スマホ	3
(W)景色を見る	10
(N)何もしない	5
(O)その他	3

4-5.　小括

本章では、計四回にわたるワークショップの実施内容を報告した。まず、千葉市における歩行者中心の場づくりのこれまでの取り組みについて、全国でも先駆的な事例でありコロナ禍を経て再開された 20 年目の「パラソルギャラリー」についてレクチャーを開催し現地視察を行った。その上で段階的にワークショップを実施し、「まち歩きワークショップ」において現地の特徴や課題を見出し、「将来イメージワークショップ」において通りの将来像の構想と新たな設いのアイデアを抽出し、「通りに座ってみようワークショップ」において滞在可能な場所の可能性を見出した。

「まち歩きワークショップ」における意見交換では、道路活用時の設いや活動が通り両端部でしかみられなかったことから、千葉公園へのアプローチとしての連続性が課題として挙げられた。以降の「将来イメージワークショップ」では、店頭幕などにより連続性を演出するアイディアが出され、さらに、「通りに座ってみようワークショップ」では、道路活用時に活動がみられなかった通り中央部でも椅子を設置する人が現れるなど、課題解決の糸口が見つかった。また、道路幅員の狭い通りであることから、全体として、道路脇や建物壁面を含む民地の活用が注目された。

滞在のための場づくりワークショップ

～実際に通りに座ってみよう！～

CHIBA NOKI-NYOKI
千葉都心ウォーカブル推進社会実験
CHIBA NOKI-NYOKI PROJECT

× YASUMORI Lab.
Chiba University,
Depertment of Architecture

社会実験にご協力いただいた参加者の方には、
千葉大ボールペンを贈呈します！！

※千葉都心ウォーカブル推進社会実験の一環です

7/23 sat.

場所：千葉公園通り

受付：①マルシン前

②焼肉十々横

時間：14:00-16:00

参加費：無料

（企画）千葉大学建築学コース 安森研究室

椅子を持って通りを歩いてみませんか？

好きな場所を見つけて椅子を置いてみてください。

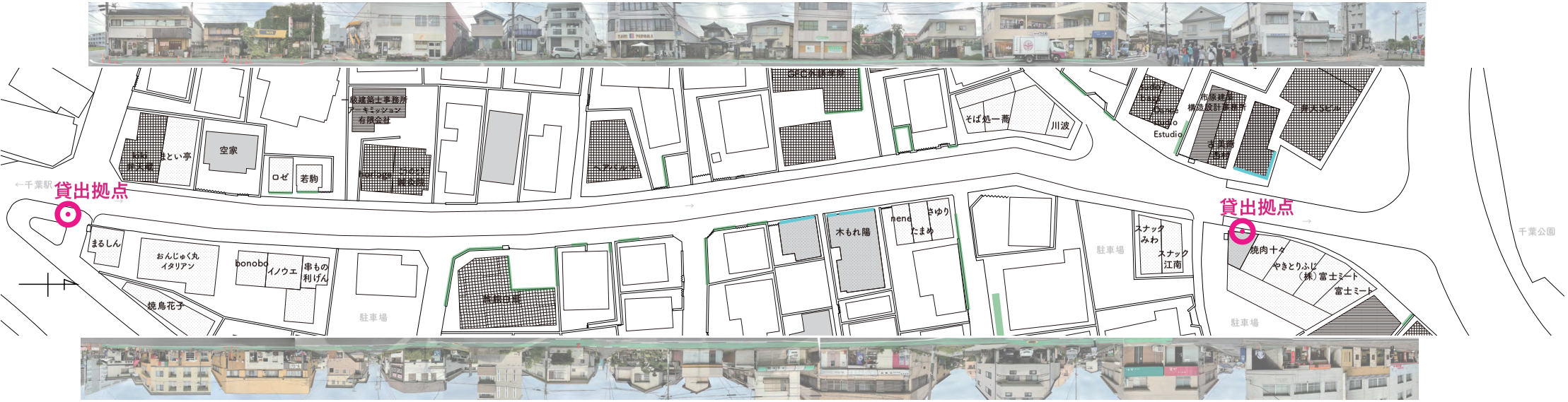
閉店しているお店のシャッターを背もたれに見立ててみたり、丁度良い軒下や木陰を発見したり ...

何気ない場所でもちょっとした工夫で、居座ってみたくなる空間に生まれ変わる可能性を秘めています。私たちは、こうした「見立て」が、通りの風景を変えていくアイディアの種になると考えています。千葉公園通りでホコ天を開始してから１年が経ちました。通りをもっと居心地の良い場所にするために、みんなで使い方を考えていきましょう！

滞在のための場づくりワークショップ

～実際に通りに座ってみよう！～

千葉大学安森研究室では「千葉都心の道路空間における歩行者中心の場づくりに関する研究」をテーマに、千葉市と共同研究を行っています。当ワークショップは、千葉公園通りを「滞在場所」として育てて行くための、可能性と課題を見つけることが目的です。どうかアンケートにご協力ください。



あなたについて教えてください。 .1

■性別：

女性　・　男性

■年齢層（歳）：

0~10　・　10~20　・　20~30　・　30~40　・　40~50　・　50~60　・　60~

■どなたとお越しになりましたか：

大人（　）名　.子ども（　）名　/　個人　・　友人　・　家族・　その他（　　）

■イベントにお越しになった目的：

出店者　・　知人が出店者　・　通りすがり　・　SNS 等を見て　・　その他（　　）

椅子の使用方法について教えてください。 .2

■椅子を使って何をしましたか（複数選択可）：

飲食（近隣店舗・持参）　・　会話　・　スマホ　・　景色を見る　・　何もしない　・その他（　　）

■椅子をどこに置きましたか：

（紙面上部の地図に描き込んでください）

■その場所を選んだ理由を教えてください（複数選択可）：

日陰があった・景色が良かった・地面が安定していた・落ち着きがあった・賑わっていた・緑があった・寄りかかれた・その他（　　）

■通りがもっと滞在したくなる場所になるために、空間や家具についてアイディアがあったら教えてください：

※紙面上部の地図も利用して自由に記載してください。